

野村傳四

「二百十日」前後

「二百十日」前後

「二百十日」と云う小説は、明治三十九年十月の中央公論に発表された者であるが、之を読んだ時は、前後を通じて始終ハラハラした気分が去らなかつた。それはこの作の随所に華族と金持と云う句が出て来て、この両階級がひどくやつつけられて居て、つまり今の文壇でいえば、プロ的分子とか、赤色とかの色彩が頗る濃厚に作中に出て居るからである。尤も先生の性行として華族と金持とは、「猫」の中の金田夫人の如く決して好遇はされて居

ない。併し「二百十日」にはそれが露骨の様に思う。私は何故にしかく露骨であつたかに就て述べて見たい。則ち「二百十日」の製作された当時の先生の心境を語つて見たい。

私が学生々活を終つて、初めて背広を着る身となつたのは、明治三十九年の九月一日からであつた。この日から私立中学校の英語教師となり、月給当分三十五円也を頂戴して、本郷六丁目の下宿から神田の間を毎日通勤する身となつたので有る。すると同月二日夕付で先生からお手紙が到来した。

拜啓別紙の通り通知有之候處拙宅では三女が赤痢で入院中交通遮断なり（尤も内々では出る）然し棄てゝ置いてもわるいと思ふから若し時間の餘裕があるなら君僕の代理に會葬してくれ給へ。右用事迄艸々。

病人は助かりさうである。金は入りさうである。講義はかけさうもないのである。中央公論はかゝねばならぬ様である。

というのである。このお手紙に就て先ず説明したいのは、当時先生は土曜日の朝だけ、明治大学の予科の英語を受け持っていた、報酬は月三十円であつたと記憶

する。その時の同大学の予科主任は今も同大学に居る内海月杖さんであった。その内海さんのお嬢さんが死亡されて、葬式が染井墓地で行われるのであった。その会葬に行けという事である。その理由は三女栄子さんの赤痢故であった。栄子さんは当時三つ位であったろう。私はこのお手紙にて希望された通り、内海さんのお葬式に先生の代理をつとめ、一方栄子さんは大学の隔離室に入院していらしたから早速御見舞に行った。当時の隔離室は大学病院の一番北部で弥生町を眼下に見下す土手の上にあった。伝染病でも極めて軽症の様で苦痛の様子は少し

も病人になく、看病は今で云えば一寸モダーン・ガールに近い年若い女中が一人ついて居る丈であつた。で私はその頃学校の帰りには毎日病院に廻つて御見舞したものである。この間御宅には一度も伺つた事はなかつたが、先生とは一二度大学の門を共に出入した。この出入の途上先生は今中央公論に「二百十日」という小説を執筆中だとか、書き上げたとか云う事と、伝染病が出た為に家内の大消毒から、井戸浚え迄させられたという事及び今一つは「世間で僕を氣違いだといつて居るが、君等が云いふらすのじやないか」と尋ねられた。私は只一言「そん

なことがありますか」と否定的に返事したら、先生は「左様かい」と云われた儘、二人は話題を他に転じた様なことが有った。栄子さんの赤痢は大した事ではなかった。

私は度々御見舞をしたけれども、一度も苦痛を訴える様なこともなく。只ベッドの上に行儀よく仰臥して居られる丈で有り、また何かに看護人にむつがりを仰った事もなかった。只一度便器で用便をされた時苦痛らしき表情を少時されたのを見たばかり、その他は病人にも病室にも伝染病という様な気分を見る事は出来なかった。ここに於て私は漱石全集の普及版、第十八卷（書簡集）を明

けて見る。栄子さんの入院は八月三十一日で、先生は高浜さんにその旨を通して居る（三四九頁）。一日おいて九月二日には私と寺田さんに手紙を出しておいでのなつて、共に病気の重体でない事が認めてある。翌三日には高浜さん、畔柳さんにお手紙が行った。二通とも病気の大事な事をのべておいでのなる。六日間野さん宛の通信には「病人は漸く快方」とあつて、御安神の様子が見ゆる。だから御病人は何等心配すべき程度ではなかつたのであるが、只消毒やら、御役人の出入やらで随分先生の神経は頗るとがった事と思う。則ち病人よりも、病氣

の善後処置がうるさかったと推測される。それと先生の神経はこのごろその昂奮期にあつた。それは私に「人が氣違いいいふらす」と仰つたのでも判るが、先生自らも「例の如く神経衰弱にて」と九月十四日奥様あてに書いて居られるのでも判る。

「二百十日」は斯ういうどさくさの中で起草されて脱稿されたのである。九月二日はまだその趣向考案中で有つた。その事は同夜寺田さんに発せられた手紙に左様と書いてある。而して同月九日には中央公論の瀧田氏あてに脱稿の旨を通じてある。すると一週間の日時をこの作に

費されたという事になる。而して今迄申した通り、栄子さんの入院から防疫員の大消毒という誰でもいやがる様な事件に逢着された先生は、恰かも神経の発作がひどかった時であって見れば、「二百十日」が左傾的であるという事も大にあり得る事かと思う。之については先生も瀧田氏あてに「殺風景な女向きのせぬもの」といつて居られる。

猶ここに云いたいのは、栄子さんの入院中奥様の御父様が重態に陥って奥さんは、すぐ御実家に泊りこんで御看病になり、一週間ばかりして十六日に御死去になった。

この前後の事は「漱石の憶い出」の中で奥様自身委曲を
尽くして語って御いでのなるからここには述べないが、
兎に角この前後は夏目家にとって正に低気圧襲来を思わ
せて今からでも御同情の念に堪えないと云う事をのべて
本稿を結ぶ。

日本文学電子図書館

「二百十日」前後

著 者：野村傅四

制作者：宮澤一郎

底 本：漱石全集(昭和49年版) 附録
岩波書店

昭和50年3月10日 発行

日本文学電子図書館